令和２年度９月号　［９月１５日（発行）］

東風だより

川口市立東中学校
川口市東本郷2-20-47番地
ＴＥＬ０４８－２８１－４０６５
特別支援学級　285-2423
さわやか相談室　281-4627
http://www.sch.kawaguchi.saitama.jp/higashi-j/

親が助けてくれた命

校　長　　安　部　正　幸

「校長先生、左目はどうしたんですか？」時々、生徒から聞かれることがあります。私の左目は２歳のときの不慮の事故によって失明し、それ以来ものを見ることができなくなりました。私の記憶の中に、ものを両目で見たという記憶はありません。皆さんにとっては当たり前のことですが、両目でものを見るとどのように見えるのか私は知りません。

事故にあったとき

私には当時の記憶がありませんので、これは後に親から聞いた話です。私は友達と高い台の上で遊んでいました。その時、誤って台から転落してしまい、運悪く頭から転落したため床から出ていた釘に額を刺してしまったそうです。両親は必至で私を病院に運んでくれました。しかし、近くの医者では手の施しようがなく、さらに大学病院に運んだそうです。（子どもながらに普通は救急車だろうと思ったのですが両親共に他界してしまった今となっては謎です）その大学病院で告げられたのは左眼視神経断裂。「この子はもう一生左目でものを見ることはできません。しかし、命が助かっただけでも奇跡だと思ってください。あとわずかで釘が脳に達するところでした。」と言われたそうです。

片目で不便だったこと

小学生の時に、少年野球チームに入っていたのですが、バッターボックスに立つとインコースの球は途中から見えなくなりました。私にとってはまさに、消える魔球でした。守備につき、フライが上がると、落下点が推測できないために、ボールを取ることができませんでした。ひたすら、自分のところにフライが来ないでくれと祈っていました。そんなことがあっても球技が好きだったので、中学校の部活動は片目でも比較的距離感のとれる、最も大きなボールを扱う部を選んで入部しました。

容姿をバカにされて

片目がつぶれているように見えるので、子どものころは、指をさして笑う者、心無い言葉をかけてくる者がいました。容姿については、自分がどんなに努力しても直すことができません。このように、その人がどんなに努力を重ねても、どうしようもないことをバカにしたり、差別する人は今でも許すことができません。

親からいただき親が助けてくれた命

世の中にはもっと長く生きていたかったのに、病気などのために生きることができなかった子どもたちもいます。私も親が助けてくれなければ、２歳でこの世を去っていたかもしれません。もともと命は親からいただいたものです。それを２歳の時に助けてもらい、それから５８年間右目だけで生きてくることができました。このことを考えると、自分の体を自ら傷つけたり、自ら命を粗末にすることは決してあってはならないことだと思っています。

できれば両目でものを見てみたい

独眼竜・伊達政宗がこの世を去る直前、「自分の像を作るとき両眼を開けた状態で作ってほしい」と言ったそうです。その理由は「せめて、あの世では両目でものを見てみたいからだ」そうです。